

千葉市感染症発生動向調査情報

2021年 第11週 (3/15-3/21) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

報告のあった定点数		11週	10週	9週	8週
上段: 患者数 下段: 定点当たりの患者数	小児科	18	18	18	18
	眼科	5	5	5	5
	インフルエンザ*	28	28	28	28
	基幹定点	1	1	1	1

「定点当たりの患者数」とは
報告患者数/報告定点数。

定点	感 染 症 名	千 葉 市					千葉県
		注意報	3/15-3/21	3/8-3/14	3/1-3/7	2/22-2/28	3/8-3/14
			11週	10週	9週	8週	10週
小児科	RSウイルス感染症		0	0	0	0	2
	咽頭結膜熱		0	2	2	3	6
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		1	4	5	7	60
	感染性胃腸炎	○	36	30	34	38	205
	水痘		0	4	0	1	21
	手足口病		0	0	0	0	0
	伝染性紅斑		1	1	1	0	3
	突発性発しん		3	7	4	7	38
	ヘルパンギーナ		0	0	0	0	1
	流行性耳下腺炎		1	1	1	0	5
インフル	インフルエンザ*(高病原性鳥インフルエンザを除く)		0	0	0	0	3
			0.00	0.00	0.00	0.00	0.01
眼科	急性出血性結膜炎		0	0	0	0	0
	流行性角結膜炎		0	1	1	0	8
基幹定点	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0	0	0	0	0
	無菌性髄膜炎		0	1	0	0	1
	マイコプラズマ肺炎		0	0	0	0	2
	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0	0	0	0	0
	感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)		0	0	0	0	0

★★:流行中 ★:やや流行中 ◎:増加 ○:やや増加 →:変化なし ↓:やや減少 ↓↓:減少

2 全数報告対象疾患(113件) ※新型コロナウイルス感染症108件は数のみ

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	50歳代	IGRA検査	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	男性	60歳代	細菌の分離・同定、薬剤耐性の確認及び起因菌の判定
結核	男性	60歳代	画像検査等				
結核	女性	40歳代	IGRA検査	新型コロナウイルス感染症	男女	10歳代～90歳代	病原体遺伝子の検出等
結核	女性	70歳代	病原体遺伝子の検出	-	-	-	-

・第11週は、結核4件(31)、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症1件(35)、新型コロナウイルス感染症108件(3153)の発生届があった。

※ ()内は2021年の累積件数。但し、累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第11週のコメント

＜感染性胃腸炎＞前週より増加した。過去10年の同時期と比べると少ない。区別の発生状況は稲毛区及び若葉区で最も多く、稲毛区では1歳～3歳、若葉区では1歳の報告が最も多かった。

■ トピック ■

<梅毒>

全国の第10週時点での梅毒の届出数は1082件で、2019年に次いで多くなっています。都道府県別では、東京都(362件)、大阪府(130件)、愛知県(77件)、神奈川県(41件)、千葉県(39件)の順で多くなっています。また、2011年から2015年までは年間3000件を下回っていましたが、2016年以降は年間4000件を上回っています(図1)。

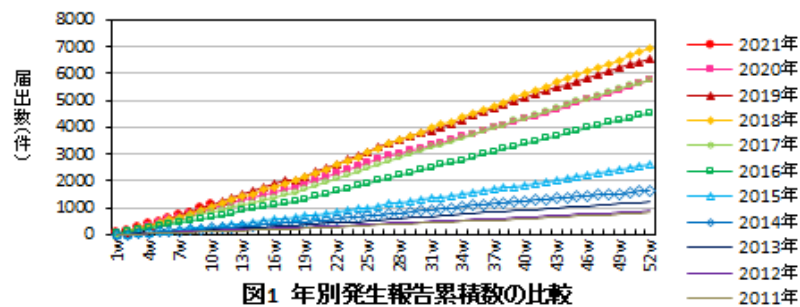


図1 年別発生報告累積数の比較
(全国:2011年-2021年第10週)

千葉市では2021年第10週に市内医療機関から4件の梅毒の届出があり、2021年第11週までの累計は12件となりました。新型コロナウイルス感染症の発生に伴い多くの感染症の発生が低いレベルで推移するなか、梅毒は過去10年の同時期に比べて最多の届出数となっています(図2)。

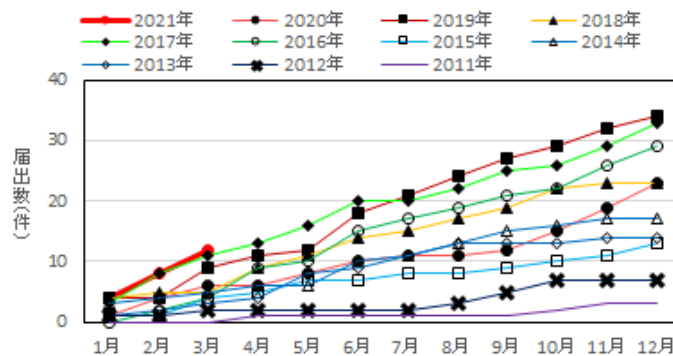


図2 月毎の累積数
(2011年-2021年第11週)

2011年から2015年までは年間20件を下回っていましたが、2016年以降は年間20件を上回っており、2020年は24件の届出がありました。また、男女比では2015年までは女性の占める割合がほぼ40%未満でしたが、2016年以降は40%を上回る年が多くなりました。2020年は男女比が同じとなり、2021年は第11週時点で男性が16.7%(2件)、女性が83.3%(10件)と女性が圧倒的に多くなっています(図3)。

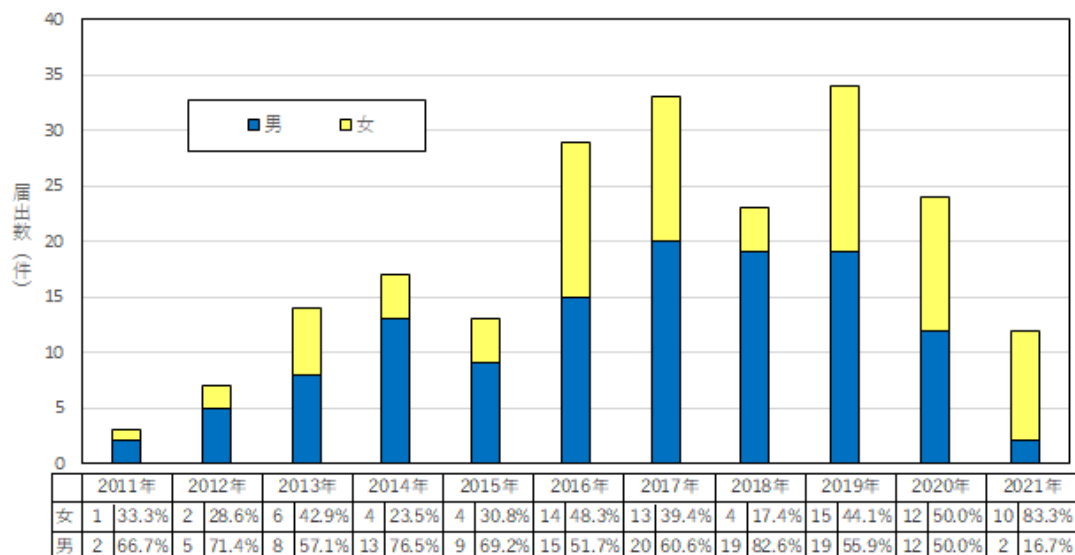


図3 年別・性別の届出数
(2011年-2021年 n=209)

男女別の年齢階級別の年毎の推移を見ると、男性では20歳代から70歳代まで広く分布しており、近年30歳代及び40歳代が増加していることに対して、女性では2016年から20歳代が最も多く、2021年も同様の傾向が続いています(図4、図5)。

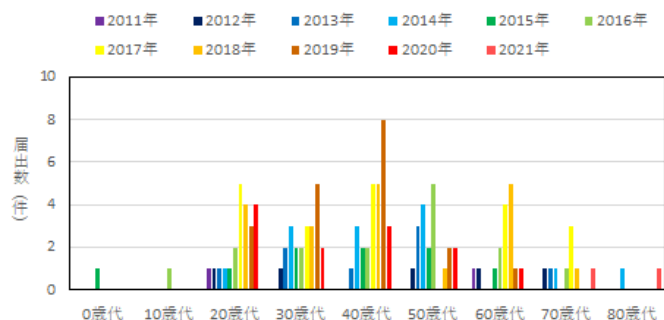


図4 年齢階級別の推移
(男性：2011年-2021年第11週)

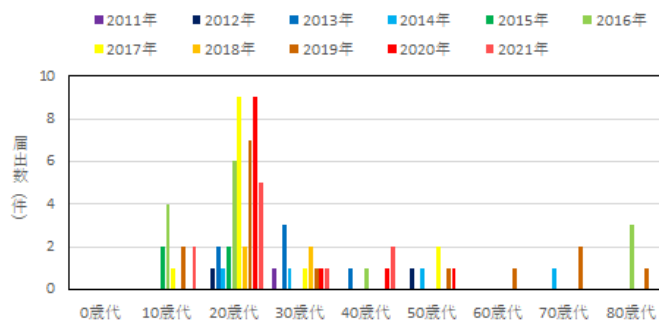


図5 年齢階級別の推移
(女性：2011年-2021年第11週)

梅毒は、早期の薬物治療で完治が可能です。菌を死滅させることはできても、臓器などに生じた障害を元に戻すことはできません。早期の治療が大切です。パートナーも検査を受け、感染していたら治療することが重要です。また、症状がなく進行する場合もあるため、治ったことを確認しないで途中で治療をやめてしまわないようにすることが重要です。完治しても、感染を繰り返すことがあり、再感染の予防が必要です。なお、梅毒はHIVの感染リスクを高める可能性があります。予防は、感染部位と粘膜や皮膚が直接接触をしないように、コンドームを使用することが勧められます。ただし、コンドームが覆わない部分の皮膚などでも感染がおこる可能性があるため、コンドームを使用しても、100%予防できると過信はせず、皮膚や粘膜に異常があった場合は性的な接触を控えることが重要です。